

第5章 全体的まとめ

近年、ひったくりが都市を中心に多発している背景には、若者を中心に遊ぶ金欲しさから比較的軽い罪悪感とゲーム感覚で犯行を実行し、しかも検挙率がきわめて低い点にある。一般に、犯行を抑止するためには犯罪機会を減らすことが重要であり、そのためには、検挙のリスクを高める必要がある。その手段の一つとして、街路照明や監視カメラがあり、現に欧米ではこれらの手段が活用されている。

わが国でも、警察や行政などの機関がようやくひったくり防止ないしひったくり犯検挙に本腰を入れ始めており、たとえば、スーパー防犯灯といったような街路照明と監視カメラを組み合わせ、しかも高速の通信機能を備えて、警察のすばやい対応を可能にする装置が開発され、一部設置が予定されている。しかしながら、このような装置が高額である点でその設置箇所には限界があり、全般的なひったくり防止ないしひったくり犯検挙はあまり期待できない。むしろ、町全体に防犯灯、とくに照度の高い防犯灯を数多く設置したり、あるいは電気代等の維持費を公的機関が援助する方向を目指すべきであろう。なぜなら、一般に、路上犯罪等は一地区の防止活動が逆に他の地区に犯罪を追いやる、いわゆる転移現象が指摘されており、一地区のみの活動では限界がある。これはまさに一地区のみのスーパー防犯灯の設置と同様の問題である。

われわれが調査対象として選択した地域は、ひったくり多発の要素としての社会的地理的状況を備えており、その意味で今後もひったくり多発の事態は大きく変化しないものと思われる。なぜなら、当該地域は地形的に平坦であり、そのため多くの住民が通勤・通学・買い物に自転車を利用し、他方犯行を試みる者もやはりこの種の自転車やバイク等を利用するため、被害者が自転車の前後のかごに入れたバッグ等が最適なターゲットとされているからである。もちろん、歩行者もひったくりの被害者となっているケースは多い。これは地形的な理由とは関係ないが、特に歩行者は携行品が表に現れやすく、しかも犯人を確認したり追跡したりするのに大きなハండి・キャップがある。

いずれにせよ、調査対象地区の住民は路上犯罪に対して大きな不安感を抱いており、また路上犯罪、特にひったくりが多発していることから早急な対応が求められている。本調査研究はその対応策への第一歩の提言にすぎず、今後さらにこの種の研究を拡張し、科学的な知見に基づいて合理的な対策をとることが望まれる。その意味で、上記に示したイギリスの例は大いに参考にすべきと思われる。

